

中村遺跡 現地説明会資料

平成 26 年 9 月 27 日 (土)

北上川の西岸に営まれた奈良・平安時代の村のあと

【調査要項】

- 委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
- 事業名 北上川中流部緊急治水対策（二子地区）
- 所在地 北上市二子町中村 10 番 3 ほか
- 調査面積 21,870 m²
- 調査期間 平成 26 年 4 月 7 日～ 11 月 30 日（予定）
- 担当者 丸山直美 高木晃 高橋義介 伊東格
佐藤奈津季 清水彩 藤原雅仁



竪穴住居群



遺物出土状況



作業風景

1. 遺跡の位置と調査区の様子

中村遺跡は南流する北上川の西岸に形成された河岸段丘上に立地して、標高は約 60m を測ります。遺跡の範囲は北上川に沿って南北に細長く、昨年まで調査された千苅遺跡の北側に隣接しています。調査の結果、千苅遺跡からつづく古代の一大集落が形成されていることがわかりました。



焼成遺構 ()

火を焚いた痕跡のある土坑を焼成遺構と呼んでいます。59 基見つかりました。平面の形状は、円形、楕円形、長方形などさまざまです。この遺構の中の土を洗うと、土器のかけらや炭化種子、獣骨片が見つかります。どうやら、土器を焼いたり、さまざまな食料を加熱する作業が行われていたようです。



①

土坑 ()

76 基が見つかりました。形は円形・方形・長方形とさまざまです。用途がわかるものは少ないのですが、炭化種子が出土するものは食糧貯蔵庫だった可能性があります。

溝 ()

17 条見つかり、東西方向に走るものが多数を占めます。用途は不明ですが、同規模の溝が東西方向に一定の間隔で作られているものがあることから、集落間を区切った区画溝などの性格が考えられます。

畝間状遺構 ()

6 箇所見つかりました。古代のはたけ跡と考えられます。当時から調査区周辺は作物の栽培に適した土地だったのでしょうか。溝埋土から直接作物の種子等が出てくることはありませんが、近接する竪穴住居内のカマドや焼成遺構からはオオムギ、イネなどの炭化種子が多数出土していることから、主にこれらを栽培していたと考えられます。



③

3. 出土した遺物

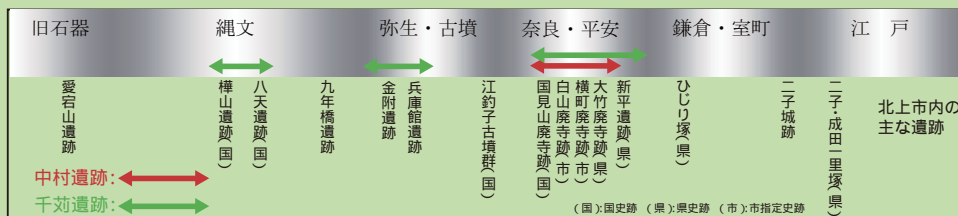
これまでに大コンテナ (30×40×30 cm) 約 60 箱分の遺物が出土しています。内訳は土師器・須恵器、弥生土器、石器、土製品、石製品、金属製品、鉄滓類です。土師器の中には、器面を赤色に塗った赤色土器がみられます。このほか、オオムギやイネなどの炭化種子、獣骨片などが出土しています。

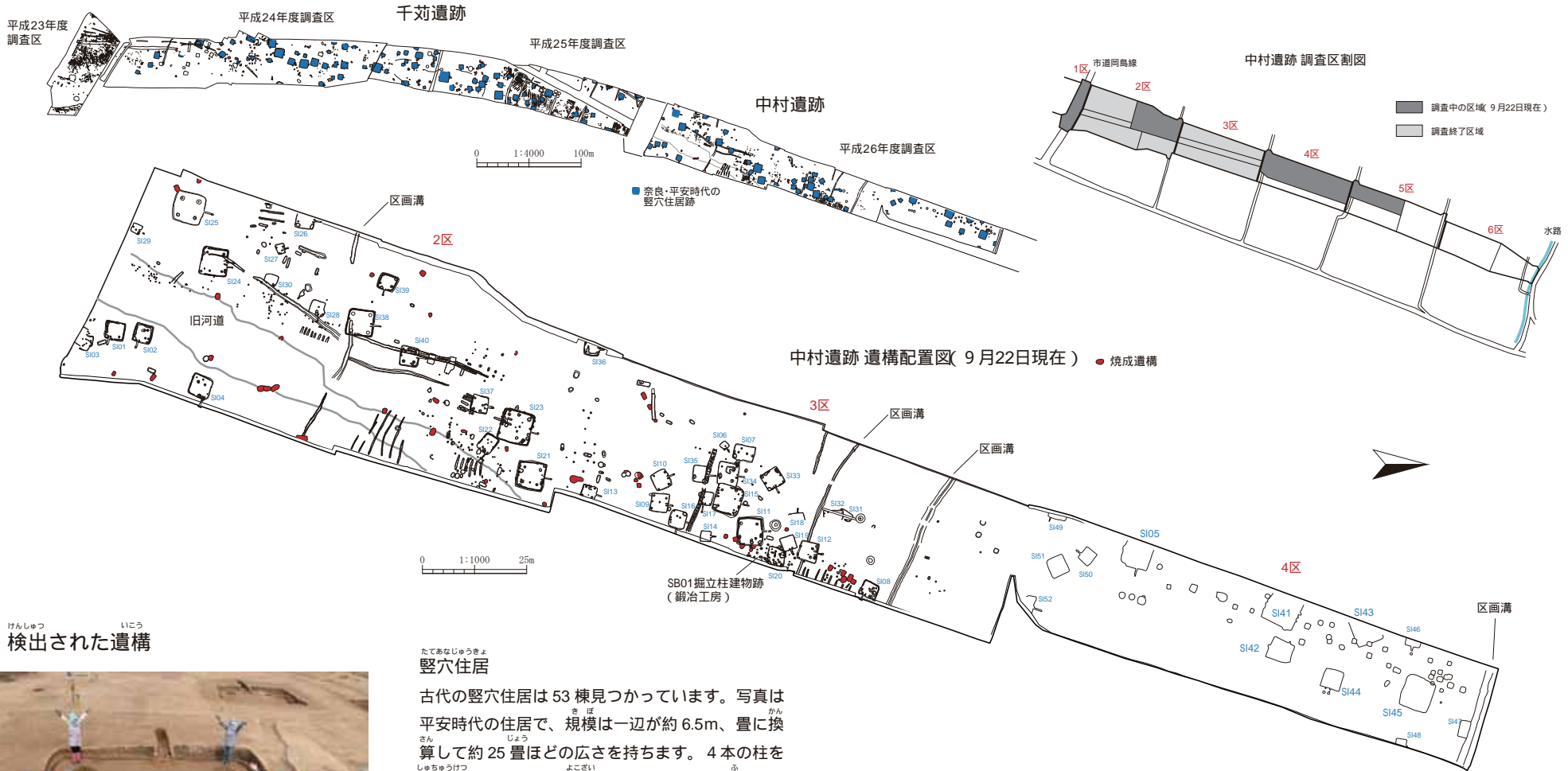


④

4. 調査成果

中村遺跡は、北上川のほとりに営まれた奈良・平安時代の大規模集落であることがわかりました。昨年までの千苅遺跡の発掘調査の成果を含めると 200 棟に迫るような竪穴住居群があったと考えられます。この規模は、北上市域で知られている集落と比較しても大きく、全体的にみても有数の規模といえます。そして、他の遺跡では普遍的に出土しない赤色土器の存在、また、多数構築されていた焼成遺構とそこに残された遺物の多彩さ（土師器片、炭化種子、獣骨片）は、これまで知られていなかった古代地域社会の文化・生業のあり方を解明するための重要な発見といえるものです。





2. 検出された遺構



竪穴住居

古代の竪穴住居は53棟見ついています。写真は平安時代の住居で、規模は一边が約6.5m、量に換算して約25畳ほどの広さを持ちます。4本の柱を主柱穴とし、これに横材をわたして屋根を置きおろす作りであったと考えられます。煮炊きをしたカマドは主に北壁の中央に作られています。



くぼんだ状態で確認された
まるとい柱材の痕跡



石の総重量300kg超!!
屋根のにせられたり、住居の周辺に積まれていたと考えられる多量の石が見つかる住居も多くみられます。



カマドにかけられていた甕
実際に炊事に使われた甕がカマドにかけられた状態で見つかるものもあります。また、カマドの焼土周辺には炭化種子、獣骨片などが残っていて、当時の人々の食生活を垣間見ることができます。

掘立柱建物(鍛冶工房含む)

2棟見ついています。写真の建物は、内部に4基の炉を持ち、炉内や周辺からは金属加工を行った痕跡が見つかりました。多数の鍛造剥片や粒状滓、それと坩堝片です。前者は鍛錬鍛冶によって発生する遺物です。ここはおそらく、遺跡内で使われる鉄製品を作ったり、修理を行ったりする鍛冶工房であったと考えられます。なお床面から古銭(熙寧元寶:初鑄1068年)が1点出土しているので、この工房の使われていた時期は古代から中世初頭頃までの時期幅で捉えられます。



土を採取し洗って微細な遺物を探します



鍛冶炉